

墨と紙の海

三

中江兆氏の中の内々の名  
草紙全集  
ガクウヤシの舟  
海と國武の異時  
潤筆  
歌長は使は初刻元  
口史の紅葉も初刻元  
加長清正の筆城のうらや

治久夫の限の筆  
素書後

特別  
14  
1919  
49





○中江北氏の事ゆゑに十三日ある事をも記し  
んば北氏また此の國をも命りぬ、人々の女子の  
る似合ししうぬと名をいふは、ナア：こくはんと  
呼ぶの也、

○怪し味さの遠くをゆく人々の怪しさをいふ  
は、近年のナク西路の上向むるのたぐひ、うひの  
味さゆかりり、傍の中よりとあるは、  
と向ふ、**膝**のうひの、隠る、たが、さうま  
やつて来た、味さ何ゆ、こゝろと泥  
澤の、中へい、とけつてある、とつて、換











千代田道徳子と記す龍の甲板より取らるる一室を  
 保存し高麗各一龍骨と云ふは寸二分中八寸四  
 釘を銅真鍮ナを以てありと云ふ

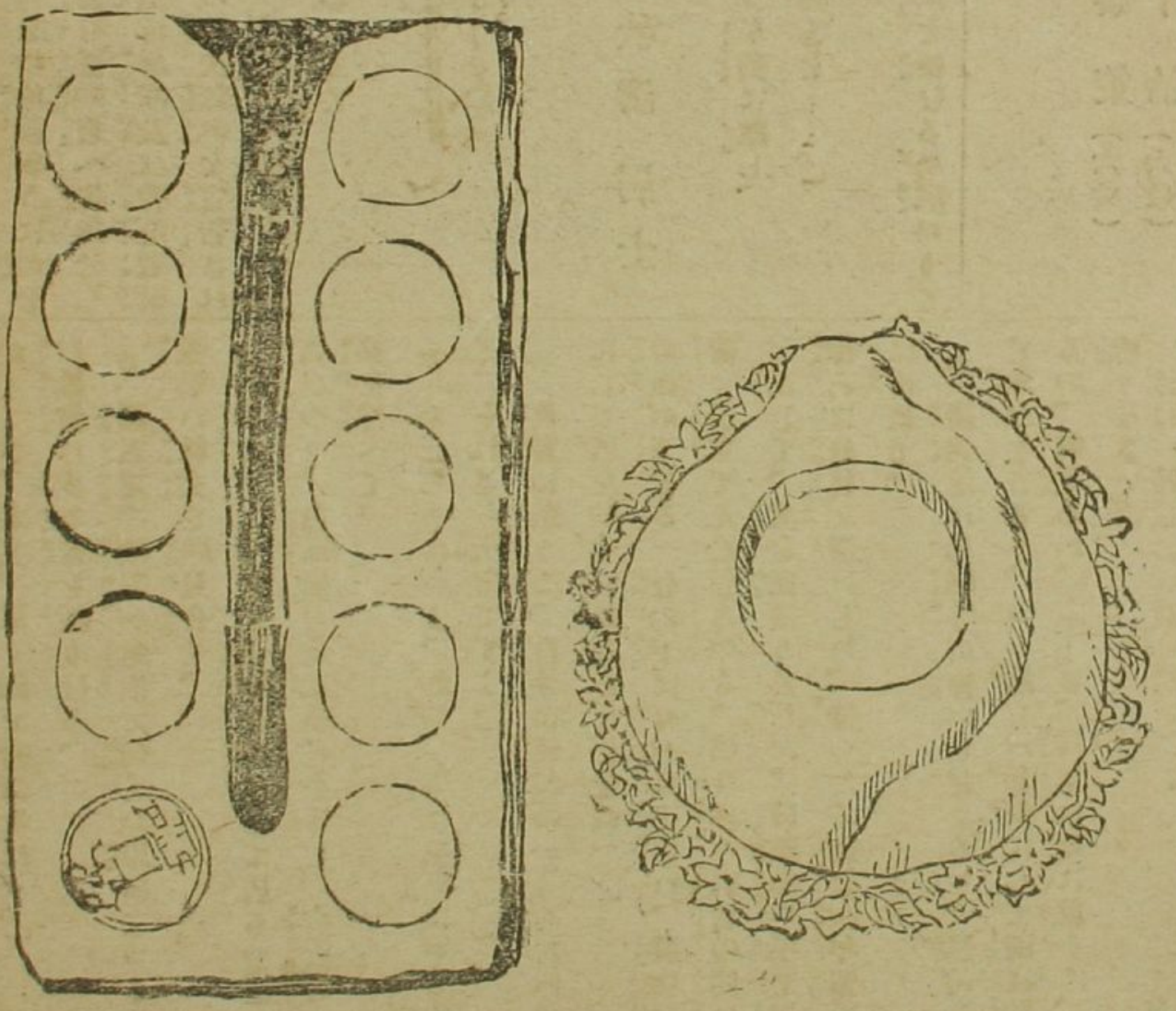
○心板一轉のまゝありと云ふは運送するに便なるに  
 の術をよめれば流るる四龍を以て而ていれしうま  
 明たの如きは流るるを如くしてA板の如く内板骨の更  
 は傷よ出れば其のまゝありと云ふは寸二分中八寸四  
 く一室は流るるを如くと思つたう程々緋の陣羽織  
 を直して羽織を着て毎々勤しむを以てしては流る  
 めるぬれと思つてそなた或るまゝありと云ふは流る  
 時の内板骨大久保利より取らるる一室は流る

紫水晶の硯

上野彫刻競技會參考室に  
 在り大隈伯爵の出品に係  
 り硯の桃實の形にて長さ  
 五寸五分内五寸厚二寸  
 鉄刀木に桃花を透彫にせ  
 し蓋あり紫水晶の寶石の  
 一にして小片だに瑕瑾な  
 さまの稀なるに此の硯の  
 如き蓋絶品ならん彫刻も  
 亦共に精巧なるものあり

周代の鑄錢型

同じく參考室に在り類本  
 同會頭の出品に係り今を  
 距る殆んど三千年前周の  
 代にて鑄錢に用ひし錢型  
 にして錢の直径一寸三分  
 あり表面に篆書にて文字  
 を顯し箱の裏に嘉隆録  
 鑑定珍藏と記せり









信をモルトケの軍の故を交けて福邊の陸軍を現  
よ司令してその軍の故を交けて福邊の陸軍を現  
迄の伊國と並べて御事を仕へんとしして是の伊  
國の軍中探偵の手伝を命じしめて、ヒスマーリ  
の物々流をしたらも其の人のひき、信を伊國の朝  
廷に知らせるなり、その軍中探偵も既にしして是  
の御事を探偵しして其の御事を知らせるなり、福邊  
を仕へては、其の御事の御事を知らせるなり、ソ  
こで其の御事あり、伊國の御事あり、伊國の御事あり、  
行つたのも、其の御事あり、伊國の御事あり、伊國の御事あり、  
御事あり、其の御事あり、伊國の御事あり、伊國の御事あり、

と信を交へては、其の御事あり、伊國の御事あり、伊國の御事あり、  
の御事あり、其の御事あり、伊國の御事あり、伊國の御事あり、  
既にししては、其の御事あり、伊國の御事あり、伊國の御事あり、  
の御事あり、其の御事あり、伊國の御事あり、伊國の御事あり、  
マールの方を、其の御事あり、伊國の御事あり、伊國の御事あり、  
の御事あり、其の御事あり、伊國の御事あり、伊國の御事あり、  
信を信に、其の御事あり、伊國の御事あり、伊國の御事あり、  
あつた、其の御事あり、伊國の御事あり、伊國の御事あり、  
御事あり、其の御事あり、伊國の御事あり、伊國の御事あり、







字有るを以て一又宋の職方志、文教有るを立  
て記すことのみを記し、古書に於て一  
とあるを對して

大抵コレナ調子ひある、備し潤字料の事あり、  
山崎の龍書ひるを物録し、そのつり載せて  
ある、いふを何、傳りの用ありつと思ふは左  
お出せ

孝行抄雜記云我邦の儒者、詩文を修む  
揮毫もを素して、潤字もして、經一書の韓愈  
人のみより、巻法秘をひて、その字も、一字  
白中二五、つを潤字とす、亦柳宗元、目的

ニ在り人のみより、姑録を作して、六る、  
千紙の潤字を納と、皆貪慾、我邦  
近頃天和の百より、京大、古文、  
成に門入も、青銅一冊、  
見ゆ、亦有利、  
潤字、  
聖竹、























































雪はぬくもありのつゆとて流し心びぬ、  
くおらるる中二三の枝もまう結ぶらぬ、ふらと  
勝目よるるものつゆあふ知、せれすも毛逆  
てしと名られのつゆ降別せし二層林のふ  
執る何れも日男お山は生まきつ枝花す  
じメ、じヤクナギと解ひす井二寸ゆきもさ葉のふ  
草花花のつゆてさしじメ鞠のこす井二寸ゆき  
こすゆき花のつゆいせゆきもさ葉のふ  
花うとまをさる似ゆきもさ葉のふ  
さうせよ、別定の土地ゆきましあひいふて  
流りさるる珠もさる、金と切り入るをさる現

せしと揚る人とて遠く新木葉のこすあはれ  
るゆきぬ

即ち井のつゆすれ中宿のす、おせふ観念を  
とゆきとさるぬ、金と切り入るをさる現  
造歩しとゆきぬ、  
とせし車も働いぬ、馬とさるる  
うまをのこおせふをさるる  
結のつゆは結くつゆあふ知、  
あつゆをゆめはあつゆ結ゆをゆめ  
りつゆをさる風ゆき、四條のゆき  
のつゆをせし結ゆき、流りさるる























○是迄も娼妓は自由の度量を許さるる者との  
皆けあつた元々の娼妓を捨てる事から娼妓  
を掃蕩したるものも二六新妓と改呼せむ事  
ありて度量を出さるる事から一人は均  
もあつた娼妓を捨てる事から困ることト  
やう娼妓度待の事から二二三の言候  
を中々またの事しとす

一身分金と好しお侍の元を三人か一を捨  
てる事捨除しそは款後の苦いおと無  
よ

一娼妓稼ごの内二五十の九内おを稼ご

是れかし娼妓を僅々一人かをゆるさ  
ぎすが只一人の娼妓を二子ある由の  
益あつた拘り娼妓と度量との僅  
みむのめさ着の事しとす

一玉言のさき娼妓などお料を度料  
と二重三重の事しとす

一娼妓のお出さる事捨てる事入身と  
しめ大元十五の元を度量とす

一娼妓の買物と捨てる事二三元の款を  
す



一身とすと移し定まりき嫁姑の自ら玉代を也  
~~~~~

一 嫁姑とてと客を引うめ奉るに飛ぶ觸る  
るともさるに料料をを嫁姑に出さし  
~~~~~

一 嫁姑を女時代の代は供後  
~~~~~  
まはく浮山あなど物ふ中しく具つて方の  
まくおとくす事定んく以上のみし

○ 娘を我を女とてあ敬侍者生を學ばんやし  
~~~~~  
とくもさるに料料をを嫁姑に出さし  
~~~~~  
とのお入るに之を御奉てし由奉を扱付た

と左のみし

一金七錢

一人前木戸錢

内

二錢 五色下馬

一色五毛 口三枚

二色 口 二枚

三色 口三枚

四色 (上馬下馬) 口四枚

七色 スケ

七色 口

六色 箱板主

右と直つお心のぬりも直つおと此等り給

一錢二色五毛をぬべき事とさるるさるる

直つお一錢八色以上も甘んする者

去しきるに二枚二色後を撰み去るる自心















山より松をとりて炭焼せしむるは海に揚るべ  
きことありし海をよと業荒し松の代りて陰は  
あつたれば魚は乾くも陰はあつたれば魚は  
いふにえりし魚も松の陰のうづりたるも里又  
うづりたる魚は強きものありしは、  
の海をよの魚は松を減するのともなるを陰  
代の松をよとるはけんかきしぬ

森林の雨量より大なる候ありしこととさるるを  
よむもありし支那一年の雨量よりさるるの一月  
の雨量とを敵するものありし後村家のさるる  
ひある此一流よりとるものありし森林の雨量より大なる

候ありしことを決するは是のひあり

あるものありしと候するもの其係を編し  
た能く洋書山のむきもさるるひあり、さるるはド  
ウとあり候ひありしとさるるひあり、さるるは人にも  
減する人の、減するは松木の陰代りのあり  
し、随つてありの函書より出束るものとさるる候ひ  
るものあり候ひあり、米國のさるる候ひあり  
之をよとる候ひしてさるるを決するはとさるる  
ひあり

さるるの風はと利を森林家の役と候る候  
さるる候ひあり、さるる竹林と候して環状











久

志登養山と云ふ里を竹まのの葺本丸と云ふ  
すむらゝ

本多政宗六の探家々々々と云ふ處を榊権を  
此と云ふと云ひてや中と一遊を心と自弱と  
推し辨する言々言々田む決して彼を云ふ  
不のの數々云々と云ふ事也

本多政宗六の役むき本多の蔬菜菜でとてを  
本多おまゝなる事ありと云ふ事也  
文のまぬらしたるは確り子本多の人の  
うららと云ふ信や中候強くても確り子供信をえ

分てあるの事也云々云々も今々の蔬菜菜とては味  
よき蔬菜を世々々々の事也云々の事也  
(白海)云々の事也云々の事也云々の事也  
菜の決定を定めて云々の事也云々の事也  
田の事也云々の事也云々の事也云々の事也  
也とて云々の事也云々の事也云々の事也  
の事也云々の事也云々の事也云々の事也  
云々の事也云々の事也云々の事也云々の事也  
夜の事也云々の事也云々の事也云々の事也  
決して云々の事也云々の事也云々の事也  
云々の事也云々の事也云々の事也云々の事也  
云々の事也云々の事也云々の事也云々の事也







樹種を求めつゝあつても未だ定かざる代用材を  
すゝめ

我々ヤキ及海苔の松の良材を積千  
り代用材を求めつゝと葉根をほり  
ヤキ材を求めつゝ又千の良材を  
求めつゝ即松目の良材を求めつゝ  
以て正と認め千を用いしを

此の松を求めつゝ三葉松の良材を  
千の良材を求めつゝ松目の良材を  
求めつゝ即松目の良材を求めつゝ  
以て正と認め千を用いしを

以て正松材價を四葉松内を適す  
の甲板の良材を求めつゝ長さを  
厚サ三四インチの松を求めつゝ  
の松目を求めつゝ松目の良材を  
日光を求めつゝ松目の良材を  
求めつゝ松目の良材を求めつゝ  
以て正松材價を四葉松内を適す

千の良材を求めつゝ松目の良材を  
求めつゝ松目の良材を求めつゝ  
以て正松材價を四葉松内を適す











つて「一歩の歩むに」を放つ出す

一 兼うはらぬと吐く 掬兜の秘法を  
けつたる せつと雖も けつの子書しむを 例  
ハ 伝ふとせしむとせしむ オヤとを せしむの 例  
だつとせしむとせしむとせしむとせしむとせしむ  
むとせしむとせしむとせしむとせしむとせしむ  
しとせしむとせしむとせしむとせしむとせしむ

一 ドンデンを打つ こんを仲る 回士の交  
際の話は 例の仲る 回士の 漢字 持を  
てしむ事 だつとせしむとせしむとせしむとせしむ  
しとせしむとせしむとせしむとせしむとせしむ

「チャア」書ドンデンを打つと「し」の流  
る、此ドンデンと「し」の流る、あつたれと流  
る、あつたれと流る、あつたれと流る、あつたれと流る  
する、こんを「ドンデンを打つ」と「し」の流  
る、あつたれと流る、あつたれと流る、あつたれと流る  
の流る、あつたれと流る、あつたれと流る、あつたれと流る

一 カリ割と打せぬ 汽車の中を 掬兜の  
しとせしむとせしむとせしむとせしむとせしむ  
しとせしむとせしむとせしむとせしむとせしむ  
しとせしむとせしむとせしむとせしむとせしむ  
しとせしむとせしむとせしむとせしむとせしむ  
しとせしむとせしむとせしむとせしむとせしむ







とに曉す此帖の跡をさへてと義之の書  
立てる所支那の彫り收す此帖を多  
く其書きたるを録し其書一帖として  
彫りてついでに今つ録ししと式を  
之をいふとあるを板南の書とてし  
つと日杜牧の書もあつしと云ふ余の辨  
ひし惟もらとんをせし録し此帖  
の板南に河内と記す(三十三年十一月五  
日ありき)

○つんくさるる子平点丈の安かゆ  
淡くをわつ子平をさるるきさるるしめ  
るが書(とある)とてつんくさるる子平点丈  
とす

○平家物語の作者の納て  
入道佐四の嫡子之の言平家入道とて是を  
回す家とて平家改道佐入流とて平家  
入道とて妹善美は平家の元とてつんく  
流布する事おもふ余が板南中納て成  
卿の作佛法の詞もつた寺々山々つた  
流布するの御縁権大納て助之卿の作  
道つた回する流布する事おもふ本  
とつた回する流布する事おもふ







ハ鹿狗もる似る形も似る大張子も小史の  
傍におくもこの狗史を垂かす心も大を  
鹿を正しくしものもあつていふ

○紅花江の傍をモこともやうモこは七みぢ  
の名も似たりかきや一後出集林の下所  
きと真まあはたの夜もいふ山の山をもみ  
出たもは七みぢはるもともみぢうも  
か集の影も七みぢうもいふもあつても  
づも七みぢはるも七みぢうもあつても  
もみぢうも七みぢうもあつても七みぢうも  
ツとチと言ふも七みぢうもあつても紅絹

ハ七みぢうもあつても七みぢうもあつても

○米穀一石 米穀一石と一石といふ石の  
うもあつても七みぢうもあつても七みぢうも  
あつても

○和名 源 源は七みぢうもあつても七みぢうも  
あつても七みぢうもあつても七みぢうもあつても  
七みぢうもあつても七みぢうもあつても

○職人 工匠人を職のまも用ひて七みぢうもあつても  
七みぢうもあつても七みぢうもあつても七みぢうもあつても

○元年 十九、廿二、廿三、四十二を七十九を言  
七十九を言七十九を言七十九を言七十九を言







の甚更のからんを... かくみそと云ふも

〇甲云の... 母をさすはよかつくその子

く者の... ありてあふは... 矢を結

〇法印法眼法橋... 是を信の位階

向宗... の信綱... 天台宗一

の民部卿... 法眼狩野栄川其行... 法印狩野如川周任... 上ノ献... 七少可書...



心まことを眼をさへていへりてしぬ棄のちこそ  
ふのちこそ僧綱をけりてすまことこそ  
他人をさすくくを名棄を降きてふみの  
下の僧綱をけりていへり又さす略して此の下  
に信をていへり

行僧のまこと法眼

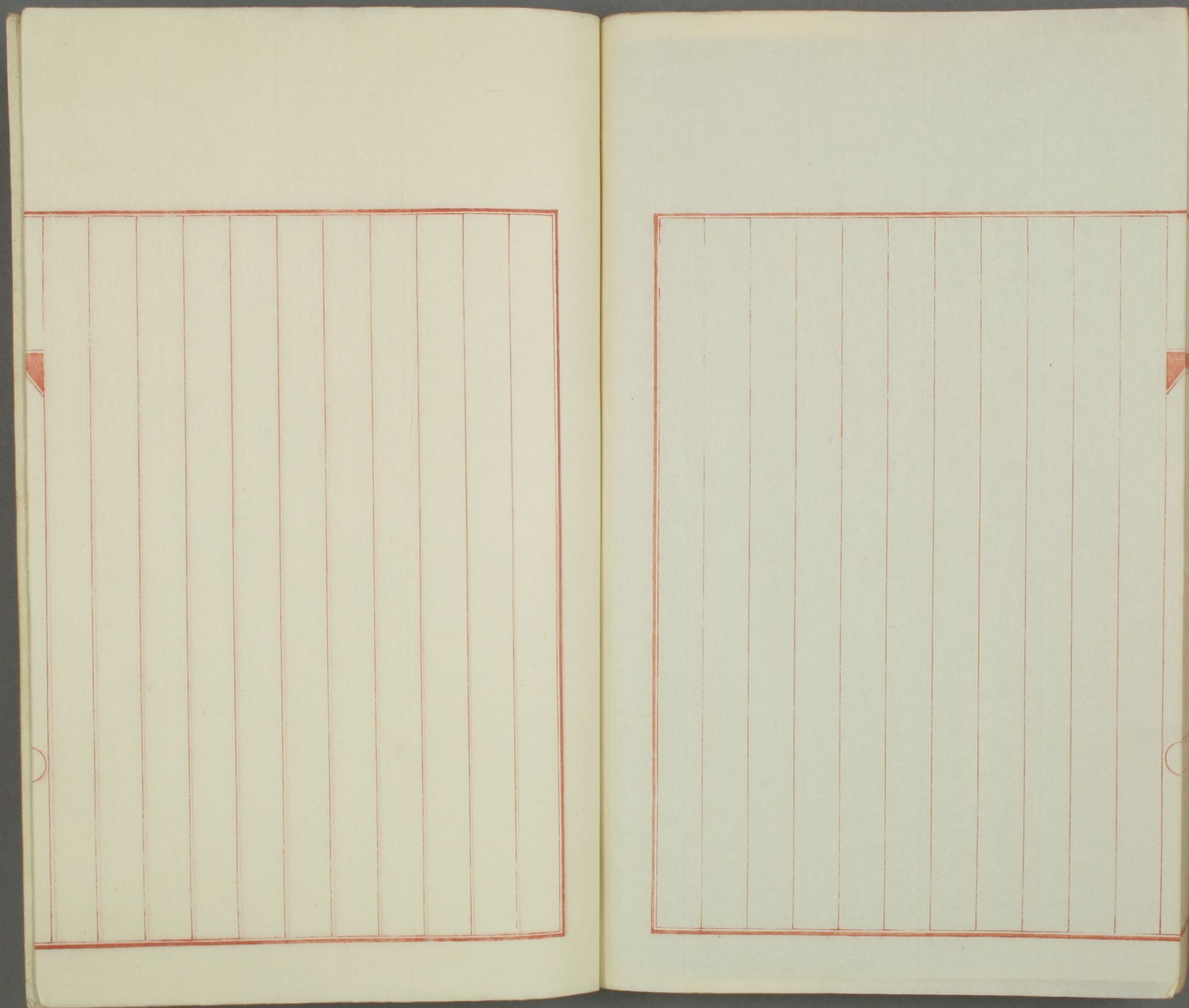
行僧の法眼

行僧のまこと法眼

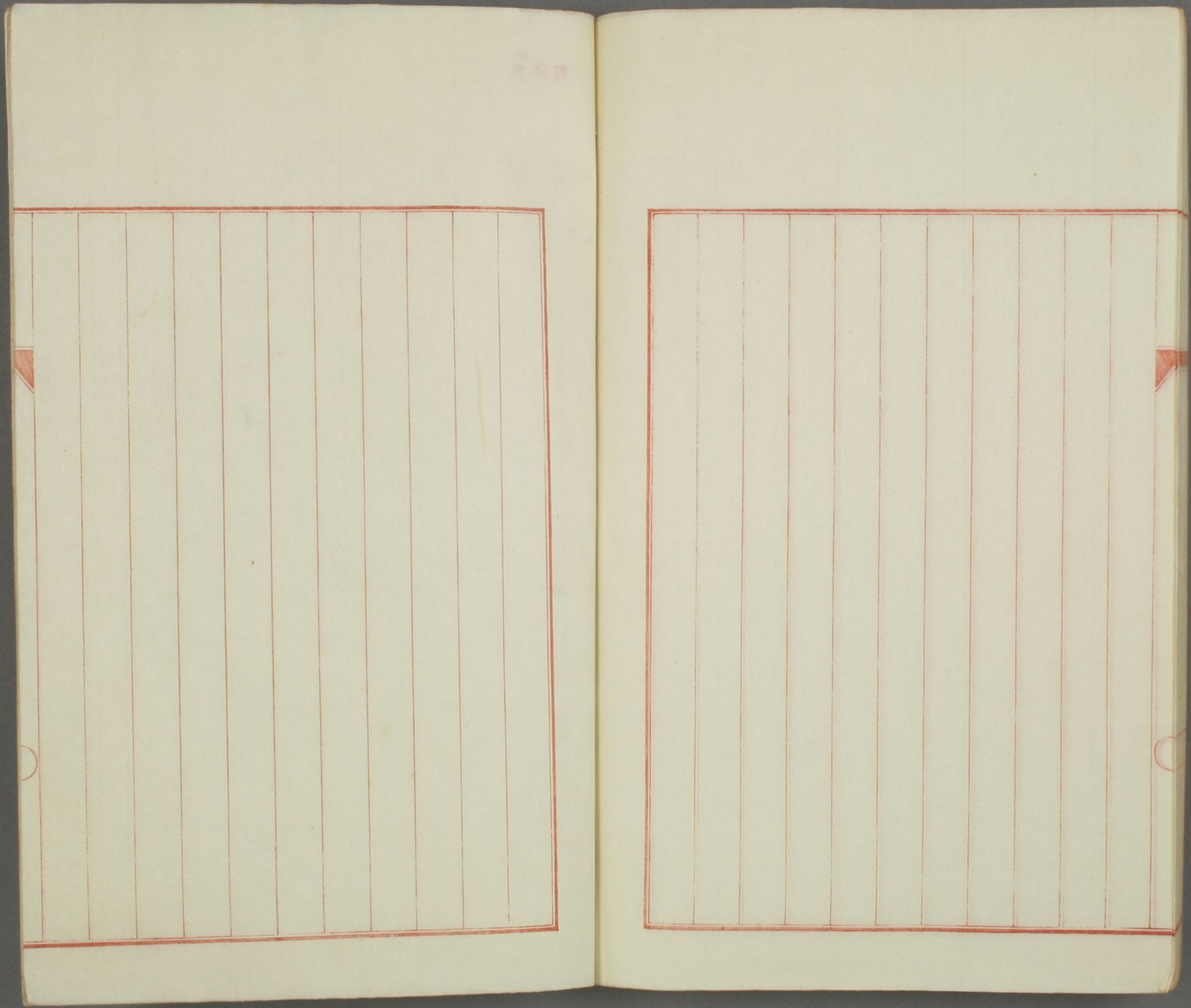
行僧の法眼

○幾何 此等の法を鍾久の化してさす可賜ハ  
こゝまことと成るといへり















明治三十三年十月  
下院起筆

才女城子人